

■知的障害のある子どもたちへの実践事例

マルチメディアDAISY図書 ～活用の経緯と3事例

岐阜県立可茂特別支援学校
司書教諭 三宅 治朗

はじめに

当校は、2011年に岐阜県美濃加茂市に開校した知的障害・肢体不自由・病弱の障害を対象とした特別支援学校で、小学部103名・中学部57名・高等部118名、計278名が在籍しています。(2023年5月1日現在)

開校当初、岐阜県高等学校教育研究会図書館部会の可茂地区の学校司書を中心とし、専修大学教授（当時は准教授）の野口武悟氏などからの開館支援を受けて学校図書館が誕生しました。

活用の経緯

開館支援のひとつに野口武悟氏編集の著書『一人ひとりの読書を支える学校図書館 ―特別支援教育から見えてくるニーズとサポート』（読書工房）があり、これにはマルチメディアDAISY図書の活用について書かれていました。

開校から4年目までは、自作絵本ソフト（当時岐阜県の特別支援学校教諭の平光紀彦氏がプログラミングしたもの）があり、昼休みなどに小学部の子

どもたちがパソコンのタッチパネルにタッチして「ノンタン」シリーズなどを読んでいました。

ところがパソコンが更新され、自作ソフトの開発環境も整備されなくなってしまいました。可茂地区のエリアマネージャー（学校司書）から「マルチメディアDAISY図書」を勧められていたこともあり、公共図書館で開催されていた伊藤忠記念財団主催の読書バリアフリー研究会に参加し、「わいわい文庫」の無償提供をお願いしました。幸いにも全作品（2023年6月現在804作品）を送付していただくことになりました。

「わいわい文庫」を閲覧するためのソフトウェアやアプリケーションについては、無料の「ChattyBooks」を整備することになり、研究情報部（現在はICT教育推進部）がインストールすることで活用が始まりました。

「わいわい文庫」は、2018年度の利用アンケート結果を参考にし、「共有サーバー」にフォルダーをつくり、保存することにしました。コピーする作

業は短時間で終了しました。いまではWi-Fi環境が整っている状態のパソコンの利用なら、リクエスト後平均30秒以内に閲覧可能となりました。

当時の館長（校長）からは、「誰かこれを使って授業を発表するといい」というアドバイスがあり、その効果的な活用が課題となっていました。そこにコロナ禍が訪れました。研究補助金ももらえる研究に応募したところ承認されたため、感染リスクの低い教育活動として、「わいわい文庫」の本格的な活用実践が始まりました。

以下、コロナ禍以前の取り組みも含めて実践事例を3つ紹介します。

実践事例1（新聞・読書週間）

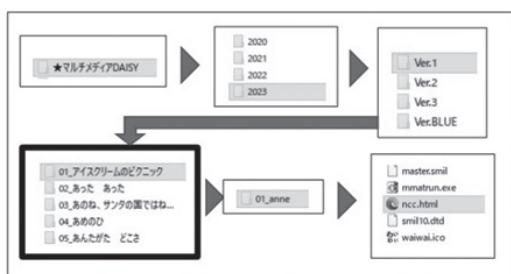
<作品名>

『とんとんとん』

あきやただし作・絵

出版社：金の星社

再生時間：6分



太枠の追加によりパソコン(「ChattyBooks」)使用時のロスタイムが減少



図書委員による読み聞かせ会

当校図書館の行事である「新聞・読書週間」のメインイベントとして、昼休みに中学部と高等部の図書委員の生徒による「図書委員による読み聞かせ会」で、「わいわい文庫」の上映を行いました。紙の大型絵本作品：加古里子著『からすのパンやさん』（偕成社）の読み聞かせの後に行くと、プレイルームに集まった小学部の子どもたちは、短時間なので集中して視聴し、大変好評でした。

実践事例2（高等部2年生）

<リクエストがあったおもな作品>

『からすのパンやさん』（23分）【生活単元学習】

『みんなうち』（5分）【生活単元学習】

『ちいさなねこ』（9分）【生活単元学習】

『ぐりとぐら』（13分）【生活単元学習】

『じゃあじゃあびりびり』（7分）【生活単元学習・自立活動】

【】はおもな活用教科等

①生活単元学習

「読みたい本をみつけよう」の単元

では、「わいわい文庫」の書影ポスターを使用して、読みたい本をリクエストし、順番に視聴していきました。



生活単元学習授業の様子

換気を十分に行い、ソーシャルディスタンスをとるなどの制限に加え、コロナ禍で対応に迫われ、教職員が不足している中での実践となりました。

紙の本も多く読み、読書好きが多いグループを対象に、実践の前後のリクエストを比較すると、附則9条本の割合が10%程度なのは変わりませんが、家で実際に読んだ本などリクエスト内容にわずかな広がりが見られるなどの変化がありました。

②自立活動

実践を行うまでに刊行されていた『わいわい文庫活用術』の実践例には載っていない実践を行いました。天井にスクリーン（そのまま天井の穴があって読みにくいため、プラスチック段ボールに模造紙を貼りました）を設置して体をしっかり伸ばした後、清

潔なマットに横になり、生徒3名が寝ころんだままで「わいわい文庫」の視聴を行いました。ふだんは動き回る生徒も静かに注視することができるなどの成果が見られました。



自立活動の授業のために設置したスクリーン

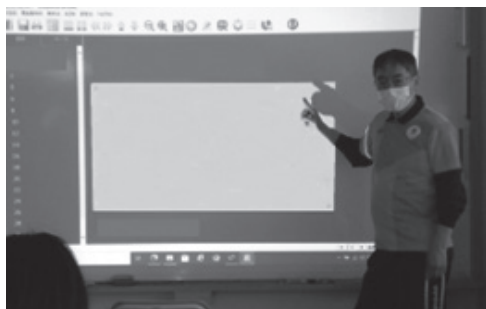
実践事例3（中学部2・3年生）

<リクエストがあったおもな作品>

- 『スーホの白い馬』（20分）【学級活動】
 - 『はらぺこあおむし』（8分）【国語科】
 - 『はじめてのおつかい』（13分）【国語科】
 - 『おおきなかぶ』（7分）【国語科】
 - 『かおかおどんなかお』（5分）【国語科・自立活動】
- 【 】はおもな活用教科等

国語科で「わいわい文庫」（伊藤忠記念財団）、「セット文庫」（岐阜県図書館）、「教科書関連図書」（校内に整

備した附則9条本のシリーズ本)などを組み合わせ、授業の前半や後半に生徒のリクエスト本(5分程度の作品)を15分視聴しました。



国語科の授業の様子

また、自立活動や学級活動の時間では、コロナ禍による制限の多い中で、みんなで「わいわい文庫」を読む時間は、楽しみの一つとなり、笑顔で毎日を送ることができました。



電子黒板を使った学級活動の授業の様子

中には、紙の本をすらすらと読み上げられるようになった生徒もおり、紙の本の利用も増えました。選書の傾向から発達段階をつかんで教師だけでなく保護者のボランティアさんとともに読書指導を行うこともできました。

おわりに

当初は「わいわい文庫」の書影ポスターを使用していましたが、生徒の実態に合わせ、「わいわい文庫蔵書検索」を使用するように変更しました。このほうが将来の蔵書検索の活用指導につながります。

わいわい文庫 蔵書検索

「何が好きですか」「食べ物ですか」「のりものですか」「絵本ですか」と生徒に問いかけ、検索結果に出た書影を選ぶ活動を取り入れた指導が効果的でした。

現在は、教師が行いますが、将来的には、蔵書検索結果の書影に触れると「わいわい文庫」が起動するようになることができると良いと思います。

当校は、2022年9月21日付で国立国会図書館の視覚障害者等用データの送信を受けることができる学校図書館として承認され、「わいわい文庫」以外のデータの活用もできるようになりました。

しかし、最近の作品には解消されているものも散見しますが、画面が上部にスクロールしてしまっていてわかりにくいものもあります。知的障害の子どもたちの中には、「固定や縮小モード」が良い児童生徒もいると感じるからです。現在のマルチメディアDAISY図書のプログラムと「固定や縮小モード」を追加したものと比較してどの程度有意差があるか比較研究が必要です。学習者用デジタル教科書の特別支援機能も進化してきているので、通常のソフ

トウェアやアプリケーションソフトにも同様の機能がつく未来にも期待したいと思います。

そのような未来を実現させるためには、当面、伊藤忠記念財団の「わいわい文庫」がさらに普及し、効果的な活用によって子どもたちの喜ぶ笑顔が広がるのが何よりも大切であると考えています。



可茂特別支援学校
オリジナルマスコットキャラクター
「にこりん」

